

夏

の

素謡

すうたい

と

仕舞

しまい

の会

阿あ 檜ひ 通みち 雨う

AKOGI

漕こぎ

青木

道喜

HIGAKI

垣がき

観世

清和

MICHIKIMORI

盛もり

杉浦

豊彦

UGEITSU

月げつ

橋本

雅夫



言葉の響きの美しさ――。

素謡 能の台本を謡い語る

仕舞 能の一部を紋付袴姿で舞う

入 場 料

一般前売 4,500円

全席自由席

一般当日 5,000円

学 生 2,500円

※通信講座受講生、放送大学、老人大学は一般料金

日時

令和8年 7月12日(日)

午前11時開演 (10時30分開場)

会場

京都観世会館

京都市左京区岡崎円勝寺町44(東山仁王門東入)

● チケットのお申込みは、お電話またはチケット販売サイト、出演能楽師へお願いいたします

ご予約・お問合せ

京都観世会館

京都市左京区岡崎円勝寺町44

TEL.075-771-6114

<http://www.kyoto-kanze.jp>

チケット
販売サイト



夏の素謡と仕舞の会

令和八年七月十二日(日)
午前十一時開演(十時三十分開場)

雨月

ツレ吉田 篤史

橋本 雅夫 片山 伸吾

宮川 卓也 大江 信行
谷 弘之助 味方 雅夫
吉田 篤史 橋本 玄
宮本 茂樹 片山 伸吾

仕舞

白楽天 野宮 殺生石

味方 團 橋本擴三郎 深野 貴彦

味方 河村 晴道 武田 邦弘 松野 浩行

通盛

ツレ大江 泰正

杉浦 豊彦 林喜右衛門 拓海

片山 峻佑 河村 博重
大江 泰正 杉浦 豊彦
松井 美樹 井上 嘉介
寺澤 拓海 林喜右衛門

檜垣

(二時四十分頃)

仕舞

道明寺 六浦 浮舟 山姥キリ

古橋 正邦 河村 晴道 鷲尾世志子 橋本 忠樹

橋本 充基 分林 道治 橋本 儀道 深野 貴彦

観世 清和 浦田 保親

河村浩太郎 吉浪 壽晃
田茂井廣道 観世 清和
橋本 光史 片山九郎右衛門
浦部 幸裕 浦田 保親

阿漕

休憩二十分

江野島 三輪 船弁慶キリ

松野 浩行 吉田 潔司 井上裕之真

吉田 和史 味方 隆之 越賀 忠樹 橋本

青木 道喜 河村 和貴

青木真由人 河村 晴久
浅井 風矢 青木 道喜
樹下 千慧 浦田 保浩
大江 広祐 河村 和貴

附祝言 (終了予定 四時頃)

主催 公益社団法人 京都観世会

※時間はおよその目安です

雨月

西行法師が住吉参詣の折、雨音の風情を楽しむ尉と月光を愛でる姥の風流な老夫婦が住む庵に宿を借りようとして、尉と姥は屋根を算くべきか算かぬべきか、雨月の風雅な争いの心を「賤が軒端を算きぞわづらふ」という歌の下の句にし、西行に上の句を所望すると、西行は「月は洩れ雨はたまれとにかくに」とつけ、夫婦は感じ入り宿を貸すのでした。時雨にまがう松風が吹き、住吉の叙景、月、雨を思う内、夜も更け、皆眠りにつきます。
やがて西行の前に宮人へ乗り移った住吉明神が現れ歌道の奥義を示し、西行を褒め、和歌を讀んで舞を奏でるうちに神は天に昇り、宮人は本性に還るのでした。

通盛

夏の阿波国が舞台。井阿弥原作、世阿弥改作。鳴門にて一夏を送る僧が、毎夜海辺で平家一門の跡を弔っています。そこへ御経を聴聞しようと女と老人が乗った舟が漕ぎ寄ってきます。暗闇の中、舟の篝火の光で読経した僧はこの浦のことを尋ねます。二人は、とりわけ小宰相(こさいしやう)の物語——一の谷の源平合戦で、夫通盛が果てたことを知った小宰相の局は絶望し、鳴門の海に入水したと語るや、二人は突如海へ飛び込み消え失せます。僧が回向を続けていると、二人が在りし日の姿で現れ、一の谷の合戦前夜の悲しい別れ、そして通盛が木村源五重章に討たれた戦期の有様を再現し、読誦のおかげで成仏の身になったと喜び消えていくのでした。

素謡(すうたい)とは

能の台本(謡本)を、舞台上で詠う演奏形式です。詠うことで情景や心情を表現します。能には「源氏物語」や「平家物語」などの古典を題材にした名作が多く伝わっており、詞(詞章)の美しさは高い評価を得ています。素謡は、その「詠うこと」のみのシンプルな表現の面白さから、大正の頃より大変な流行となりました。また、京都には歴史的に「京観世」とよばれる「素謡」の文化があります。江戸初期寛文の時代、服部宗巴(九世観世大夫黒雪の弟、服部梧元)の息のちに種王盛親が、西陣にあつたといわれる観世屋敷で謡の教授をしたのが始まりです。以後、京都では能だけでなく、人々が謡だけをたしなむ「素謡」というジャンルが好まれ、連続と受け継がれてきました。戦前は、京の辻々で謡の音がよく聞かれたようです。情緒豊かな「素謡」をライブでじっくりと聴いてみてください。

仕舞(しまい)とは

能の一部(見せどころ)を、紋付袴姿で、謡にあわせて舞う演奏形式です。ほとんどの曲は扇を持ちますが、演目によっては長刀や杖などを持つものもあります。舞い手の骨格が見えやすいので、能のデザインと評され、演者の個性と技を楽しめます。数分の演技で能の醍醐味が味わえるのが仕舞です。

檜垣

世阿弥作。肥後国(現熊本県)若戸山の観世音に参籠し既に三年になる僧が、百歳にもなろうかという老女が仏に水を供える為に毎日険しい道りを通る事不可解に思いを尋ねます。老女は後撰集にある「年ふれば我が黒髪も白川の 名づはぐむまで老いけるかな」は、藤原興範に水を請われた折に自分が詠んだ歌であり、自分がかつて大宰府に住んだ白拍子であると明かし、僧に回向を頼み姿を消します。僧が白川を訪ねると、檜垣の女の霊が年老いた姿で現れます。消えぬ執心ゆえに今でも地獄で熱鉄の桶で水を汲み続けている僧の甲いよって猛火が消えていると喜びます。昔の美しい面影は二度とかえらぬもの、興範に舞を請われた思い出を語り、更なる回向を願うのでした。

阿漕

日向国の男が伊勢参詣の折、阿漕の浦を訪れ、来かかった老人にこの浦の謂れを尋ねます。老人は、この浦は古歌に詠まれた旧蹟・阿漕浦だと教えます。又、伊勢大神宮御膳調進の網を引く所で、殺生禁断の場。しかし阿漕という男が毎晩密漁をしていたことが露見し、この沖に沈められたことからついた名だと答え、自分こそがその阿漕の霊であると明かします。男に回向を頼むうちに海が荒れ、辺りを闇が覆い、その中へ老人は消えています。
男が法華経を誦読していると、地獄の責め苦にやつれ果てた姿の阿漕の幽霊が現れ、娑婆にて度々網を引いた様子を見せます。そして陰惨な地獄の有様を見せ、更なる回向を願って海底へと消えていくのでした。

夏の素謡と仕舞の会

日時 令和八年 7月12日(日) 午前11時開演(10時30分開場)
会場 京都観世会館 京都市左京区岡崎門勝寺町44
入場料 一般前売 4,500円 一般当日 5,000円 学生 2,500円

※上演中の写真撮影・録音・録画はお断りします。
※携帯電話の着信音・時計のアラーム音が鳴らないよう、あらかじめ電源をお切りください。
※都合により出演者に変更がある場合がございますので、あらかじめご了承ください。
※お車の方は、会館東隣りの有料駐車場、または岡崎公園市営駐車場等をご利用ください。
※公演中止の場合を除き、入場券払戻はできません。



【交通アクセス】
JR京都駅から
●地下鉄烏丸線「烏丸御池駅」にて地下鉄東西線に乗り換え、「東山駅」下車、1番出口より徒歩約5分
●京都駅前バスのりばA1より市バス5系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車、D2より86・206系統「東山仁王門」下車(乗車時間約30分)
四条河原町から
●バスのりばEより市バス31・46・201・203系統「東山仁王門」下車(乗車時間約15分)
京阪三条駅から
●市バス5系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車
●地下鉄東西線に乗り換え、「東山駅」下車